

「この先の僕らは」

律…主人公。背が低い。心優しき常識人。宗明とは保育園からの幼馴染。

宗明…口調が荒い。めんどくさがりだが世話焼きな一面もある。冬希に振り回されている。

透夏…冬希の兄。生徒会に所属している。成績優秀で人望も厚く、なんでもそつなくこなす。

冬希…透夏の妹。一つ下の学年で、成績優秀。どこか抜けていてほわっとした雰囲気だが、己の信念は曲げない我儘プリンセス。

宗明「…よお。」

透夏「ちゃんと来たんだね。えらいじゃないか。」

宗明「こんだけしつこく連絡されたら誰だって来るだろ。どうにかしやがれ。」

透夏「ははは、俺の手には負えないよ。さ、あがつて。」

SE：玄関ドア閉める音

SE：ビニール袋の音

宗明「これ、お袋が持って行けつて。」

透夏「お気遣いどうも。あとで頂くよ。…浴衣3着あるけど、どれがいい？」

宗明「なんでこんなにあるんだよ。」

透夏「毎年母さんが買ってくるんだ。中三からほとんど身長伸びてないのにね。」

宗明「ほーん…どれでもいいから、適当に着せてくれ。」

透夏「俺の趣味でいいってことかな？それとも似合うやつ？」

宗明「なんでも…いや、まあ、無難に似合うやつでいい。」

透夏「了解。脱いだ服はこれに入れて。」

宗明「おー。」

透夏「…髪はどうする？希望があれば聞くよ。」

宗明「別にこのままでもいいだろ。」

透夏「たまにはお洒落しなよ。もったいないだろう。」

宗明「めんどくせえ。やるなら勝手にやれ。」

透夏「はいはい。」

SE：衣擦れの音

透夏「できた。その椅子座って。」

宗明「おー。」

透夏「…なんだか、昔を思い出すな。」

宗明「あ？」

透夏「みんなで海に行った帰り、冬希のついでに全員ドライヤーをかけてやったことが

あっただろう。」

宗明「覚えてねえよ。そんな前のこと。」

透夏「お前、最後まで嫌がってたんだぞ？俺は風邪ひかないからいいんだって。風呂嫌いの犬みたいだったよ。」

宗明「るせえな。今は大人しくしてんだからいいだろ。」

透夏「ははは。確かに。…大きくなったね、宗。」

宗明「は？キシヨ。お袋かよ。」

透夏「前向け馬鹿。まだ終わってない。」

宗明「痛っ！首もげるだろうが！」

透夏「はははっ。」

SE：玄関チャイム

SE：玄関ドア開ける音

律「遅くなってごめん！結構待ったよね。」

透夏「大丈夫。俺達もさっき終わったところだよ。冬希は？」

律「最終調整中。お母さんがこだわり出しちゃってさ。」

透夏「はは。冬希はおばさんのお気に入りだからね。」

律「ほんとごめんね…あれ、宗明！髪形がいつもと違う。」

宗明「こいつにやられた。」

律「かっこいいよ！浴衣もすごく似合ってる！冬希が見たら喜ぶんじゃないかな。」

宗明「…そうかよ。」

透夏「律も似合ってるよ、俺のおさがり。」

律「ぐっ…嬉しいけどなんか複雑だなあ。僕も二人みたいに、すらっとかっこよく着こなしたかったよ。」

宗明「ちっこいのも個性だろ。気にすんな。」

律「気にするよ！というか、気にしてるんだから言わないで！」

透夏「律はそのままでもいいんだよ。あ、ヘアピンつける？もつとかわ…魅力的になると思うよ。」

律「いないよ！二人して面白がつてるでしょ！」

冬希「あれえ？りっちゃんいじめてるの、だ〜れだ？」

宗明「！」

律「冬希！終わったの？」

冬希「うん。おばさんがすごく頑張ってくれたの。どう？」

透夏「よく似合ってるよ。なあ、宗……」

宗明「……可愛いんじゃないの。そら、行くぞ。」

冬希「やった〜！花火楽しみだねえ。」

宗明「引っ付くな！どうせお前はメシのことしか考えてねえだろ。」

冬希「そんなことないよ？やきそば食べて、輪投げして、から揚げ食べて、ラムネ飲んで、それから…」

透夏「……。」

律「…透夏？どうしたの。」

透夏「あ、いいや、なんでもないよ。…行こうか。」

SE：歩き去る音

BGM：がやがや

律「わあ、結構人いるね。先に場所取りしたほうがいいかな？」

透夏「そうだね。屋台もそんなに遠くないし、このあたりにしようか。」

律「じゃあシート敷くね。あ、重りしないと飛んで行っちゃうかな。」

透夏「俺見てるよ。ついでに荷物おいていく？」

律「え…。」

冬希「お兄ちゃん行かないの？」

透夏「ああ、おつかい頼めるかな。」

冬希「いいけど、なんで？お兄ちゃん一人になっちゃうよ？」

透夏「気にしないでいいから。楽しんでおいで。」

冬希「でも…」

宗明「…行くぞ。腹減った。」

冬希「しゅーちゃん！」

律「あ…買ったらすぐ戻るから！待っててね、透夏！」

透夏「ゆっくりでいいよ。気をつけて。」

透夏「……はあ。」

律「（透夏の様子がおかしい気がする。きっと、まだ悩んでるんだ。せめて気分転換が

できるといいんだけど…）」

律「…やっぱり僕、戻ろうかな。」

冬希「え？」

律「ほら、二人ずつ行けば寂しくないし、お祭りも楽しめるかなーなんて。」

宗明「…。」

冬希「りっちゃん…じゃあ、そのから揚げ買って行ってあげて？ある程度見て回ったら

戻って来るねえ。」

律「うん。楽しんできてね！」

宗明「……いっちょ前に氣い遣ってんじゃねえよ。くそつ。」

冬希「やっぱりそう、なのかなあ。」

宗明「…おら、さっさとやりたいことやって戻るぞ。どこ行く。」

冬希「…うん！まずはあそこの…」

透夏「（俺は結局、何がしたいんだろう。勝手に傷ついて、嫉妬して、逃げて。挙句みんなに気を遣わせている。）」

透夏「…いつからこうなったんだか。」

透夏「（冬希の小学校入学に合わせて引っ越しをした。隣の家へあいさつに行くと、ちょうど同じ年の律がいた。律は俺たちを気遣って、よく遊びに誘ってくれた。そこで出会ったのが——宗明だった。律の幼馴染。口調こそ荒いけれど、友達想いで、俺にはない自由さを持ったやつ。俺たちはすぐに仲良くなって…小・中と長い時間を共に過ごしたんだ。）」

（宗明「進路希望調査？あー。あったなそんなの。」）

（透夏「先生には進学校に行けって言われたんだけど…少し、悩んでいるんだ。」）

（宗明「そんなもん、行きたいところ書きゃいいだろ。先生はお前の人生保証してくれ

ねえぞ。」

(透夏「!…そう、だね。はは。確かにそうだ。…宗はどこにするか決めた?」)

(宗明「さあな。特にやりたいことねえし、律と同じところでもいいんじゃないの。近えし。」)

(透夏「ふーん。そうか。」)

(宗明「…キシヨ。なににやけてんだ。」)

(透夏「別に。なんでもないよ。」)

透夏「(気づいたときにはもう、好きだった。この先もずっと、そばにいらればそれでいいと思っていたはず…なのに。)」

透夏「(…髪、昔より硬くなってたな。)」

透夏「はあ…気持ち悪。」

律「透夏。」

透夏「!り、律。どうしたの。」

律「から揚げ買ってきたんだけど…もしかして、体調悪い?」

透夏「いや、大丈夫。ありがとう。」

律「無理しなくていいからね。いただきます。」

透夏「いただきます。」

律「……。」

透夏「……。」

律「…透夏。」

透夏「なに?」

律「この前空き教室で話したとき、自分が変われば周りも…って言ったよね。」

透夏「ああ、うん。実はまだ…」

律「ごめん!」

透夏「……え?」

律「僕、考えが足りてなかった。そのままの透夏でいいはずなのに、変われなくて…それって、今の透夏を否定してるのと同じだよ。」

透夏「そんな、律が気にすることじゃないんだ。これは俺の問題で…煮え切らないのは事実だし、律のアドバイスは間違っていないんだよ。」

律「そうだとしても、僕は透夏を傷つけた。だから、ごめん。」

透夏「律…頭、あげて。俺は大丈夫だから。」

律「……うん。」

透夏「少しだけ、聞いてもらってもいいかな。あまり面白い話ではないんだけど。」

律 「聞く。聞かせてよ。」

透夏 「…俺、好きな人がいるんだ。そいつは俺のことを友達だと思っていて…俺も、そいつのそばに居られるなら、友達のままでいいと思ってた。」

律 「うん。」

透夏 「だから、そいつに好きな人や恋人ができて、幸せを願おう、応援しようって思ってたんだ。でも…」

律 「…。」

透夏 「…見ていられなかった。どうして俺じゃだめなんだ、俺ならこうするのに、

って…でも、だめだ。敵わない。だって俺には…あんな表情、引き出せないから。」

律 「透夏…。」

透夏 「なのに…諦められなくて…っ好きで、どうしようもなくて！…もう、わからないんだ。」

律 「…辛いんだね。」

透夏 「……。」

律 「透夏は、諦めたい？その人のこと。」

透夏 「…好きでいたい。でも、こんなに苦しいのはもう、御免だ。」

律 「そっか。その人に、自分の気持ちを伝えたいって思ったりする？」

透夏 「こんな感情…気持ち悪いだろう。重いし、きっと距離を置かれる。」

律 「そうかな。その人の考えはわからないから、ただの想像になっちゃうけど…自分を好きでいてくれる人って、結構貴重な存在、だと思うんだよね。ずっと想い続けるってなかなかできることじゃないし、気持ちを押し付けずに相手を尊重するのって、

すごく難しいことだと思う。それを知っていれば、透夏が想いを伝えたとしても、気持ち悪いだなんて思わないんじゃないかな。」

透夏 「…でも、負担になる。知らなければ余計なことを考える必要もないだろう。」

律 「余計かどうかはその人が決めることだよ。それに、伝えなかったら透夏の想いに向き合うこともできない。…透夏は隠すのが上手いから、きっと言われるまで気づけないんじゃないかな。」

透夏 「……。」

律 「…なーんて、言えた口じゃないんだけどね。あはは。…僕もさ、日頃思っても言えない事とかあるから、少しわかるよ。伝えるって勇気があるし、間違えたら傷つけちゃうこともあるでしょ。だから怖くて。その点、ストレートにもの言える宗明たちは本当にすごいよ。尊敬する。」

透夏 「…そうだね。」

律 「あ、一人で喋りすぎた…！話聞くはずだったのに、ごめん！」

透夏「いや、いいんだ。なんだか少し、すっきりしたよ。ありがとう。」

律「そう…？そつか。それならよかった。」

透夏「から揚げ、冷めても美味しいね。」

律「これも食べる？甘辛ソース味。」

透夏「ありがとう。俺のも食べていいよ。」

律「うん、ありがとう。」

冬希「二人とも！ただいまあ。」

律「おかえり。わあ、大漁だね。」

冬希「みんなで食べようと思って。お兄ちゃんどれがいい？」

透夏「ああ。焼きそば、貰おうかな。」

冬希「はいどうぞ。りっちゃんは？」

律「うーん、どれにしようかな…」

宗明「…透夏。」

透夏「ん、どうした。」

宗明「悪かったな。氣い遣わせて。」

透夏「…何の話かな？」

宗明「氣にしてねえならそれでいい。それなりに楽しめたから、その…感謝してる。」

sonだだけだ。」

透夏「…宗。俺も——」

宗明「あ？」

透夏「俺も、お前に伝えておきたいことがあるんだ。あとで時間もらってもいいかな。」

宗明「…わかった。話すときNINEくれ。」

透夏「ああ、ありがとう。」

BGM：花火

律「わ、始まった！」

冬希「綺麗…来てよかったねえ。」

宗明「ふん。」

透夏「…写真、撮ろうか。花火を背景にしてさ。」

律「いいね！冬希撮ってよ。」

冬希「ふふん。インカメはお任せあれだよ。みんな集まって。」

宗明「暑い。くつつくな。」

透夏「結構寄らないと入らないんだよ。ほら詰めて。」

律 「宗明見切れてるよ。ほらこつち。」

宗明 「くそっ…。」

冬希 「撮るよお？はあい、ちーず！」

SE：写真撮る音

BGM：遠のく